

# 琉大ニュースレター Vol.28

#### [目次]

●注目! 琉大生 02 法文学部 4年次 (取材時)

法文学部 4年次(取材時) 銘苅 隆磨さん

- ●琉球大学のSDGsへの取組み 03
  - ·SDGs×琉大生
  - ·SDGs×研究
- ●ポストコロナ社会実現 07 研究プロジェクト
- ●授業紹介 09

世界展開力強化事業(COIL型教育)

- ●ニューストピックス 11
- ●大学基金だより 13



#### ハルトプライズ琉大 運営メンバー

前例左から 喜舎場大智 (国際地域創造学部2年) 銘苅隆磨 (法文学部4年次) 知念杏珠 (観光産業科学部3年)

ニライウェト・エシロング・バンダム (国際地域創造学部3年) 仲本莉里歌 (法文学部3年) (取材時)

ハルトプライズ (Hult Prize) は、ハルトプライズ財団が主催する世界最大の学生起業アイディアコンペです。国連とパートナーシップを結んだ数少ないプログラムの一つで、2009年からこれまでに世界120カ国以上の100万人を超える学生が参加しています。

参加者は、まず学内大会 (On-Campus Program) へ参加する必要があり、学内大会の優勝チームは地域大会 (Regional Summit、日本は東京で開催) に進みます。琉球大学では、運営メンバーを中心に、初めての学内大会を2020年に開催しました。



Island wisdom, for the world, for the future.





# ■琉球大学のSDGsへの取組み

2015年9月に国連総会で採択された「我々の世界を変革する: 持続可能な発展のための2030アジェンダ」に記載された持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals; SDGs)。

琉球大学においては、社会全体の持続可能な発展に寄与することを教育の理念とすると明記した「琉球大学憲章」を2007年に制定し、その基本理念に基づき、持続可能な社会の発展に向けた行動を推進してきました。2020年2月に国立大学法人琉球大学SDGs推進室規程を制定し、同年6月に本規程に基づき、4つのワーキンググループ(研究、教育、社会貢献、業務・ガバナンス)を設置して、本格的な取り組みを開始しましたので、その事例を紹介します。

#### 琉球大学SDGs推進室の取組み



持続可能な社会の実現のために、琉球大学の目指すVision「地域とともに豊かな未来社会をデザインする大学」と「アジア・太平洋地域の卓越した教育研究拠点大学」に向けたSDGsに関する取り組みを、研究、教育、社会貢献、業務・ガバナンスの各ワーキンググループが連携し、学生・教職員と共に推進していきます。評価指標にはTHEインパクトランキングとSDGs学内アンケートを活用し、取り組みの改善をしながら持続的に活動を進めていきます。

SDGs推進室 ホームページ



#### SDGsに関する研究の推進

SDGsの実現を支える知識とソリューションを提供するために、大学内の各研究者の研究活動がSDGsの様々な目標とどう関連しているかを可視化するとともに、SDGs達成に貢献する研究および産学官連携の推進・支援を行っていきます。

#### SDGs達成に貢献する教育の推進

現在及び将来にSDGs達成に貢献する人材を育成するために、SDGs達成に貢献する教育実践に向けたシンポジウムやワークショップの開催、授業科目とSDGs目標の関係の可視化、SDGs教育カリキュラムの構築等を通じて、自ら主体的に考え行動する能力を引き出すSDGs教育を行っていきます。

#### SDGs達成と社会貢献の推進

社会実装における分野横断的リーダーシップを提供するために、地域との共同事業によるSDGs目標の対応状況の可視化、ICTを活用した離島教育の環境改善、子どもの貧困問題への対応、SDGsの概念を取り入れたキャンパスツーリズムの展開、国際貢献の見える化と方向性の確認等の取り組みを行っていきます。

#### 組織ガバナンス、運営を通じてSDGsの原則を具現化

ダイバーシティの取組みによるSDGsへの貢献のために、女性研究者支援及びダイバーシティ推進事業の実施、ハラスメントのない「多様性と包摂性」に富んだキャンパスコミュニティの実現、SDGsコミュニケーション活動の推進、組織内部管理に関するSDGs目標及び指標の設定等に取り組んでいきます。



#### SDGs × 琉大生

# 文理を超えたボーダレスなプロジェクト 沖縄市の子育で支援アプリ「サポまる」の開発



「サポまる」とは沖縄市の奨学金制度や子どもの居場所など、子育てに関する様々な支援制度をまとめたスマートフォンアプリ。これまで沖縄県では、市や町が独自に様々な子育て支援制度を設けてきたが、情報が点在しているため、助けを求めている人が必要な情報にたどり着けていないという状況にあった。そこに着目したのが人文社会学部1年の島袋鈴菜さん。

写真左から宮田龍太先生(工学部 助教)、杉浦さん、島袋さん、吉田さん、本村真先生(人文社会学部 教授)



THE BILL THREE COURSE CALCER CRIMING - P.
COMMENCING MEMORY - P.
COM

(サポまる主要メンバー3名)



人文社会学部 1年 島袋 鈴菜



理工学研究科博士前期課程 2年 吉田 裕行



理工学研究科 博士前期課程 1年 杉浦 伊織 (取材時)



サポまるQRコード

#### コロナ禍でも出来ること 総合大学だから出来ること

**島袋**「サポまる開発のきっかけは、本村真教授の授業で子どもの貧困について学んだことでした。その繋がりでボランティア活動をした時に、学生提案型企画にも参加することになりました。コロナ禍でもできる企画は何か?と考えた時に、子育て支援に関する情報をひとつにまとめて誰でも簡単に検索できるスマホアプリを思いつきました。でも私にはアプリを作る技術がない」

そんな時に目に止まったのが、昨年6月の県議選に際して琉球新報と琉大工学部の学生が共同で企画・制作した「りゅうVOTE」だった。数問のアンケートの回答を選択肢から選んでいくことで、自分と各候補者とで考えの近さをAIにより判定されるアプリだ。島袋さんは、このアプリを監修した工学部の宮田龍太助教をシラバスで検索して、協力を要請するメールを送った。

宮田「他学部の1年生からメールを貰う事なんてまず無いので非常に

驚きましたが、どうにか協力したいと思い、技術的側面のサポートとして『りゅうVOTE』の開発者である杉浦くんと、教育で活用できるアプリを研究している吉田くんを繋げました。何かを作る上で、そのバックグラウンドを知ることも必要。僕らは子ども食堂って聞いた事があるくらいだったので、研究企画室に相談して、児童福祉に関する専門知識のある本村先生を紹介してもらいました。これでチームが揃った」

#### 物事は、思惑通りには進まない

プロジェクトメンバー同士の打ち合わせは、全てオンラインで行われた。しかし島袋さんの文系チームが担当した支援制度のヒアリング調査は、オンラインで対応できない事業所も多く、資料の郵送や電話確認など思った以上に時間がかかったため、理系チームは短期間での制作を余儀なくされた。

**吉田**「僕はチャートマップや簡単な地図などを担当しました。どちらもAIを使うためプログラミングが必要なんですが、先生から提案してもらった手法でチュートリアルを繰り返しておいたので島袋さんからデータを受け取ったらすぐにマップ化することができました。チャートマップの導入により、サイトを訪れた人が必要な情報にたどり着くまでのアクションを大幅に減らすことに成功しました」

杉浦「最初は『りゅうVOTE』みたいなものでという話だったので、質問形式にしたプロトタイプを作っていたのですが、途中で今のような表示形態に変更することになるという苦労がありました。工夫したのは、スマホでもPCでも見やすいレイアウトにしたとこと。表示速度にもこだわりました。トレンドの技術も勉強しながら取り入れました」

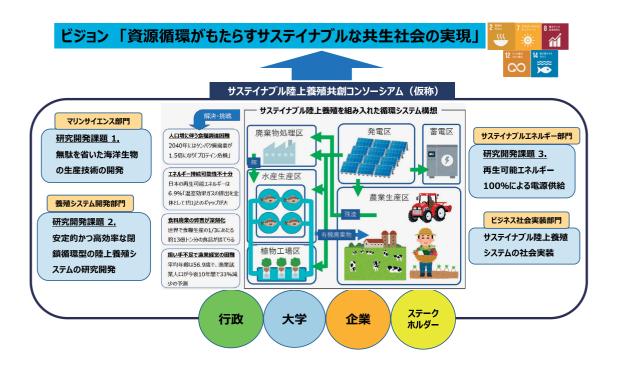
#### 一通のメールが繋げたもの

島袋さんが勇気を出して送った1通のメールにより、文系・理系の枠を越えたチームが生まれ「サポまる」が完成した。メンバーそれぞれのアイデアや知識、技術を集結させて、ひとつのものを作り上げたこの経験は、彼らにとって今後の就活でアピール出来る武器となるだけでなく、自分のできること、やりたいことを見極めるための自己分析としても大きな役割を果たしていたようだった。

#### SDGs×研究

# 沖縄をモデルケースに 東南アジア、島嶼諸国の問題解決を目指す 陸上養殖の研究

2020年度、国立研究開発法人科学技術振興機構(略称JST)の「共創の場形成支援プログラム (COI-NEXT)」育成型として、理学部の竹村明洋教授をプロジェクトリーダーとする「資源循環型共生社会実現に向けた農水一体型サステイナブル陸上養殖のグローバル拠点」というプロジェクトが採択された。これは魚の養殖を陸上で行うことを起点として貧困、循環、リサイクル、エネルギーなどの問題を同時に解決するプロジェクトで、琉大以外にも、高等専門学校(高専)、企業、地方自治体など様々な分野の機関が参画している。



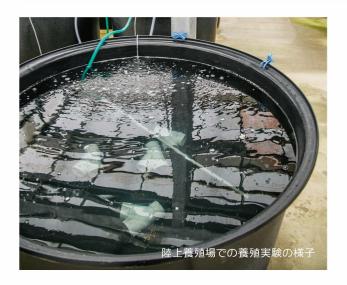


#### **食とエネルギーの循環モデルの** ストーリー

「現在は、沖縄という島嶼をモデルにしますが、見据えているのは島の問題の課題解決ではなく、SDGsという大きな枠組みでの問題解決。国内、東南アジア、島嶼諸国の問題を解決するきっかけを沖縄からはじめようというものです。今はヤイトハタ(沖縄名:ミーバイ)という沖縄にいる魚を陸上養殖していますが、地域や生き物が変わってもできるシステムにすることがポイントです。また、そこで生産された魚は単なる食糧として腹を満たすだけでなく、経済価値を見出し、養殖に関わる人達の経済的自立や働きがいに繋がらなくてはならないのです」

島嶼モデルというと周りに海があることが前提のように感じられるが、このプロジェクトは陸の孤島でも使える独立したシステムであり、インフラが整備されていない場所でもできる。再生エネルギーを使って水も循環させるから、場所を選ばず単独で成り立つ。極論では砂漠でもできるシステムなのだ。

「私の専門は環境生物学で、応用研究として生き物を効率よく生産することを研究しています。陸上養殖に関しては以前から構想



はありましたが、実際は資金や設備などの問題で絵空事になっていました。しかしそれが(株)メイキットなどから共同研究の相談を頂いたことで実行に移せた。中城村にも協力いただき、漁港に陸上養殖施設(中城村養殖技術研究センター:NAICe)も作っていただきました。また、オリオンビール(株)から彼らが商品を製造する中で出てくる残渣(濾過したあとなどに残ったかす)を無駄にしたくない、というお話が出てきた時に、それをヤイトハタの飼料にするシステムを作ろうと。色々な方の断片的なお話をつなぎ合わせてみたら面白かった。こうやって人や企業とが繋がっていきました」

陸上養殖を展開する際に解決しなければいけないのが、エネルギーコストの問題。本学では工学部 千住智信教授が再生エネルギーの専門であったため、研究開発課題リーダーとして迎え、再生可能エネルギーを活用したサステイナブルな事業を展開する(株)メイキットと共同研究で100%再生可能エネルギーによるシステム構築に取り組む。

飼育水槽の監視システムや水の濾過など陸上で魚を飼うためのシステムは、先述の(株)メイキットと地域連携推進機構 島袋亮道特命准教授との共同研究により構築されつつある。残餌や、養殖生物の糞尿なども有効活用するための技術研究も行い、ごみゼロの循環型システムデザインの形成を目指す。



## 出口を見据えた仕組みづくり

このプロジェクトの出口は、養殖システムの確立ではない。実際

に養殖している人がそれで経済的に自立し、将来的には教育にも 繋げることにある。

「企業ができること。我々ができること。自治体ができること。それらが合わさって問題解決していくことこそが共創の場と言えます。しかし、立場や考え方の異なる人が集まるため軌道に乗るまでが大変です。今後10年続けていくには、それぞれの研究をすることはもちろん、我々初期メンバーだけではできないところが絶対にあるので、共創の場として更に多様なステークホルダーの方を迎え入れ、更に大きなチームと仕組みを作る必要があります」

日本の漁業は、高齢化による後継者不足など、下降気味なイメージがあるが、実は世界的に見ると漁業の生産量は伸び続けている。天然ものは資源が限られているのでどこも頭打ちだが、養殖では世界的に右肩上がり。つまりビジネスチャンスなのだ。

「しかし海での養殖は日本ではもうこれ以上できません。特に沖縄には台風の問題があり、漁業権の問題がある。新規参入が難しい分野なのです。陸上養殖なら管理がしやすく、水質も常時監視できるので安心安全です。私は短期間で育てられる方法を研究していて、しかも取引値が高い時期を目指して生産コントロールを行うことを視野に入れています。これからの漁業はデータサイエンス。日本の養殖業は昔ながらの経験に則った力仕事といったイメージから、若者からは敬遠されがちですが、ヨーロッパなどではコントロールセンターに座り、エビデンスに則ったやり方で世界中の養殖場を管理するスタイルに変わってきています。AIを使ったゲノム解析など、若者も入って来やすい産業になっているのです」

データを管理しながら生産コストを下げつつ、商品価値のある 魚などを養殖することで経済的に自立できる産業にする。更には、 魚の養殖場を近年増えつつある植物工場と合体させることで、ま た新たな循環社会のモデル形成を目指す。琉大ブランドの魚も近 い将来、スーパーに並ぶ日が現実となるかもしれない。



# ■ポストコロナ社会実現研究プロジェクト

琉球大学では、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の世界的規模での感染拡大という未曾有の危機に直面し、浮き彫りとなった新たな社会・経済・環境にまたがる複合的な課題の解決に向けた研究を推進することを目的として、「ポストコロナ社会実現研究プロジェクト」を立ち上げました。2020年度より、4件の研究プロジェクトがスタートしています。

今後のニューノーマルな社会変革に備えた課題解決へ挑戦するために、琉球大学の総合大学としての強みを活かし、コロナ禍の社会課題解決に資する研究を支援しています。

#### ポストコロナ社会における学校と地域社会のニューノーマル

研究代表: 背戸博史(地域連携推進機構 教授)



教育は止まらない、止められない。学校は最もニューノーマルの確立 を必要とする場所です。

本研究は、新型コロナウイルスの感染拡大に際し、沖縄県における学校とそれを取り巻く地域社会が如何に対応したのかを解明することで学校と地域社会のニューノーマルを構想するとともに、本研究で得られた基礎データを提供することでより具体的な対策のための専門研究へと橋渡しすることを目的としています。

まず、発生段階では不測の事態に対してどのような対応がとられたのか、その際、何が優先されたのか等を検証します。次に、復旧段階においては児童生徒に対するサポートや学校再開に向けた取り組みがどのように行われたのか、行政や地域社会からの支援の実態にも留意し検証します。本研究ではこうした観点から基礎データを収集し、いずれ訪れるであろう復興段階(ポストコロナ社会)に向けて検討されるべき課題を明らかにすることで、学校と地域社会のニューノーマルを展望します。

#### ICTを活用した「令和の日本型教育」実現のための学校支援システムの開発

研究代表: 杉尾幸司(教育学研究科 教授)



中央教育審議会が公表した「令和の日本型学校教育」の中の「遠隔・オンライン教育を含むICTを活用した学びの在り方」、「STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成」、「新時代の学びを支える環境整備」に焦点をあて、eラーニング、STEAM教育、ICTを活用した教師の負担軽減をキーワードに学校教育の周縁を支える支援システムの開発とその効果の検証を行うことを目的としています。

学校教育においても「学校で学びたくても学べない児童生徒への遠隔・オンライン教育の活用」や「個々の才能を存分に伸ばせる高度な学びの機会など新たな学びへの対応」などが期待されています。本研究では、eラーニングを活用して、遠隔・オンラインのSTEAM教育を実施し、これらの問題の解決に向けての試みとその効果についての検証を行います。また、スマートフォンを活用した「学校・家庭間の情報共有システム」の開発と効果の検証も実施したいと考えています。



## ポストコロナ:

#### 太平洋島嶼における健康・安全な社会・学校づくりに関する研究

研究代表: 小林潤 (医学部保健学科 教授)



現在新型コロナウイルス感染症は単にウイルス感染症としての影響だけでなく、メンタルヘルスや生活習慣病の悪化等につながっています。

これまで、保健学研究科が培ってきた国際ネットワークを利用して、沖縄・グアム・フィリピン・インドネシアでの保健・教育・経済の分野での新型コロナウイルス感染症の影響と対策における知見をまとめ、それを基に太平洋島嶼国との専門家との討議によって、島嶼地域のポストコロナの健康な社会・学校づくりに対して提言を行うことを目的としています。

併せて、太平洋島嶼国で具体的にどの様な分野・課題の人材育成が必要なのか、さらに新型コロナウイルスの長期的蔓延で課題があぶりだされてきている保健・医療分野にとどまらない、他セクター融合アプローチの実現に関わる人材育成の必要性をも討議する予定です。

なお、研究成果は論文としてまとめられるだけでなく、実際にポストコロナを睨んだ新たな研修コースの実施につながればと考えています。

## Postコロナ、Withコロナ社会でのVR/AR を用いた 医療系学生のための臨床実習学習支援プラットフォームの開発

研究代表:大内元(病院救急部 特命講師)



医療系学生の臨床実習は、コロナ禍で多くの制限を受け、これまでのような教育効果 (アウトカム) が期待できない状態に追い込まれています。 このため、新たな形での臨床実習の確立が喫緊の課題となっています。

本研究では、3密、学生-患者の直接接触を避けた状態で、より臨床に近い環境を再現。臨床実習に代わる知識・技能・態度(コンピテンシー)のトレーニングを効果的に行うための学習支援プラットフォームの開発を目指しています。臨床環境の再現には、従来のシミュレーション教育をさらに進化させた、VR(Virtual Reality)・AR(Augmented Reality)・MR(Mixed Reality)技術を用い、遠隔でのオンライン臨床実習環境を構築。受講生すべてが個別の場所からインターネットにアクセスし、Web上の仮想空間で、効果的な実習ができることをゴールとしています。もちろん、患者さんに直接触れることのない実習には、限界もあります。現実世界での臨床実習に期待される教育効果をどこまで補完することができるか、大きなチャレンジです。

# 介

2022 年度の5か年)を実施しています。 教育を活用 た太平洋島嶼地域の持続的発展に資するグロー L た米国語 一等との 1 大学間交流形成支援 Ŝ バルリーダーの育成」事業(2018 に採択され、 СО L

# 嶼 地 域 持 続 的 成

琉球大学は、 2 8 年度に文部科学省の「大学の世界展開力強化事業~ 型教育を活用 CO 1 L 型

世界展開力強化事業 -ムページ





# こんなリーダーを育成します。

太平洋島嶼地域の大学とのオンライン授業& 海外交流プログラム(派遣・受入)を通して学生交流を増やします。 そして、島嶼型グローバル人材を育成します。

# 1 統合型リーダー

政治、資源、文化、イン フラ等の多面的、複合 的な問題点を統合しな がら課題解決のための 仕組み作りを行うこ ができる人材

#### 2 特定課題型リーダー

専門的な分野と全体的 な枠組みとの関係性を 認識した上で、特定の課題に関する課題解決 のための仕組づくりを 行うことができる人材

この事業では、琉球大学と深い交流を持つ、ハワイ大学、グ アム大学、パラオ地域短期大学、ミクロネシア連邦短期大学、 マーシャル諸島短期大学との COIL(Collaborative Online International Learning) を基盤とした教育連携により、太平 洋島嶼地域の SDGs (持続可能な開発目標) 達成に積極的に 貢献するリーダーの育成に取り組んでいます。

COIL とは、オンラインを活用した国際的な双方向の教育 手法のことです。リアルタイムで交流を行う同期(シンクロ) 型、動画、ファイル、メッセージ等をアップロードしてコンテ ンツの共有、意見交換を行う非同期(アンシンクロ)型、その 両方を使用するハイブリッド型の三種類があります。学習の 目的に応じて使い分け、国際共修を実施します。琉球大学の 世界展開力強化事業においては、連携大学が太平洋島嶼地域 にあり、ハワイとの19時間(実質5時間)の時差が最大で、 他の地域と比較してシンクロ型が活用しやすいというメ リットがあります。

なお本事業は、グローバル津梁プログラム(副専攻)を中心 に据えたグローバル人材の育成を進めています。その中で学 部学生の皆さんがそれぞれの専門性を活かしながら国際共 修を行える、共通教育と専門教育を連動させた全学プログラ ムを実施しています。



#### 他大学にはない、 琉大だけの COIL の特徴とは

琉大が世界展開力強化事業で連携するのは、ハワイと グアム、パラオ、ミクロネシア、マーシャル諸島といった 太平洋島嶼地域であり、最大の時差がハワイの 5 時間。 欧米を対象とした他の大学に比べて、同期(シンクロ)型 を無理なく活用できるという利点がある。またグローバ ル津梁プログラム(日本人学生向け)、グローカル・リー ダーシッププログラム(受入留学生向け)の中で、太平洋 島嶼地域の SDGs を中心とした課題解決に取り組むリー ダーの育成という、連携校全体が関わる目標を共有して いるということも重要な特徴である。その目標を遂行す るために日本人と留学生が共に学ぶ国際共修という学び の場を提供することと、全員が気軽に、そして誰もが今行 われていることを理解し共有するために、英語オンリー ではなく多様な言語をチャンプルー(ごちゃまぜ)にする 「チャンプリンガル」という方針を掲げているのも大きな 特徴だ。

#### COIL 型授業の実例

世界展開力強化事業としては、日本人学生と留学生が協働する国際共修の科目が最も重要であり「グローカル実践演習 I ~ IV」「個と多様性」「グローカルリーダーシップ論」「グローバル SDGs」がそれにあたる。いずれも本学の COIL としての重要な観点を実践していて、学生からも非常に人気の科目となっている。

「中でも『個と多様性』は、COIL の中で一番印象的だっ

た授業です。これは自分のライフストーリーを書くという授業で、3~4人のグループでお互いインタビューしながら自分のキャラ(Character)を探していきます。オンラインでどこまでできるだろうかと思っていたら、思いがけず皆すごく深い話をするようになり、会ったことのない異文化の相手といつの間にか友達になっていたのです。言語はチャンプリンガルでおこない、誰一人置いてけぼりにしないという約束を守ってもらいました。分からない事は卑下しない、否定しない。相手が分かるまで説明する。相手に伝えるためには他の人を頼っても良い。深い話になればなるほど、苦労はしていますが工夫して頑張っていました。回が進むごとに深いレベルのコミュニケーションが取れて来ていたので、チャンプリンガルにしてよかったと思っています」(山元先生)

#### 琉大で COIL 型授業を受けるに当たって

「心構えは無いほうが良いです。これから入ってくる学生たちはデジタルネイティブ世代なので、オンラインで繋がるのはもはや当たり前ですから。あえて言うならば、グローバルな世界は自分たちの外側にあるのではなく、自分たちがすでにその一員であるということを知っておいてほしい。そしてその世界を担う責任感を持ってほしいし、同時にその世界の改善に積極的に働きかけていく義務と共に権利もあることも知っておいて欲しい。グローバルというと、アメリカ的な考え方とか英語というイメージを持たれがちですが、直訳すれば球。どこにも切れ目がないし、全部繋がっていて、誰もが中心になれる。そういったマインドの転換が必要です」(石川先生)

# UR Topics

[9/30]

琉球大学病院が 琉球ゴールデンキングスの チームドクターに関する協定を締結





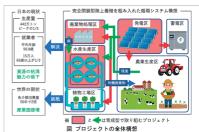
#### [12/16]

JST共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT) に 本学の学際的チームが採択され、資源循環型共生 社会実現に向けた農水一体型サステイナブル陸上 養殖プロジェクトを開始

#### 【プロジェクト名】

資源循環型共生社会実現に向けた農水一体型サステイナブ ル陸上養殖のグローバル拠点

参画機関:沖縄工業高等専門学校、オリオンビール株式会社、 株式会社メイキット、株式会社マチス教育システム、エコソー ラー・ジャパン株式会社、中城村





#### [12/11]

オリオンビールと研究推進機構が SDGsに関する産学連携協定を締結





※P5.6に関連

#### [12/15]

琉大キャンパス内にキッチンカーが出店

学生及び教職員の福利厚生の一環として、キッチンカー出店 の試行が行われました。





#### [12/22]

大学院保健学研究科と沖縄県立看護大学大学院 保健看護学研究科 単位互換に関する協定を締結

令和3年度から、学生がそれぞれの相手大学大学院の授業 科目を履修し、単位を修得できます。







#### [1/20]

#### 令和2年司法試験で 本学の修了生6名が合格

令和3年1月20日に発表された司法試験の結果、本学の修了生6名が合格し、最終合格率は23.08% (72校中21位)でした。昨年度の合格率14.71% (73校中36位)から大きく躍進しました。

なお、今年度の合格者6名全員が沖縄 県出身者です。



#### [2/15]

ENEOSらと共同で琉球大学キャンパスにてシェアサイクルを 活用した新たな交通環境の創造による行動変容研究を開始

実証実験として自動車での通勤・通学によって慢性的に交通渋滞が発生している琉球大学敷地内および大学周辺エリアにおいて、電動アシスト自転車のシェアリングサービスを提供することで自動車通学率を抑制し、交通渋滞緩和に取り組みます。





# 新型コロナウイルス感染症に関する支援

# 【特設ページ】 新型コロナウイルス感染症に関するお知らせ等のまとめ

本学が公式ホームページに掲載した新型コロナウイルス感染症に関するお知らせの記事等をまとめたものです。(随時更新中)



#### 相談窓口

大学生活や修学等についての悩みや不安が あれば、専用メールアドレスまでお問合せく ださい。



#### 体調不良時の連絡体制

少しでも体調に違和感がある場合はご連絡 ください。



# メンタルヘルスの相談 (保健管理センター)

こころとからだの健康相談を受け付けています。



からだの健康相談 水・金曜 9時~12時 こころの健康相談 月・木曜 9時~12時



#### 琉球大学における新型コロナウイルス感染症の影響を被る学 生への緊急支援制度一覧

学生の皆さんが安心して学業に励むことができるよう、公的な、また本学独自のさまざまな学生支援制度を用意しています。





# 大学基金だより

新型コロナウィルス感染症(COVID-19)の影響により、社会全体が困難に直面する中、多くの方より、本学へ多大なご支援を賜りました。心よりお礼申し上げます。

琉球大学修学支援基金などの学生支援へご寄附いただいた方々のご芳名を掲載させていただきます。

沖縄セルラー電話株式会社 (代表取締役社長・湯淺 英雄氏) より、生活に支障をきたしている留学生に 役立てることを目的として、本学に支援金をご寄附 いただきました。寄附額は、応募した留学生に10万 円が支給され、167名の学生に合計1,670万円の ご支援をいただきました。

施球大学

「地球大学

「は が 大学

「は が 大学

「な が 大

左)沖縄セルラー 渡具知 武之取締役、 中)留学生の張 学超さん 右)西田 睦学長

また、令和2年11月30日(月)には追加の支援としてオンライン授業を受講等する上で、学業及び研究に支障をきたしている留学生に役立てることを目的として、iPad Pro46台を貸与いただきました。



左)沖縄セルラー 渡具知 武之取締役、中)留学生の David Abdul Konneh さん右)西田 睦学長

公益財団法人金秀青少年育成財団(理事長・松本 眞一氏)より、「沖縄県内10大学等への困窮学生 支援緊急助成金」の一環として、「琉球大学修学支 援基金」へ300万円のご支援をいただきまし た。



左)西田 睦学長、右)松本 眞一理事長

吉武登氏(よしたけ保育園理事長)より、経済的に 困窮する学生支援のための「琉球大学修学支援基金」へ合計150万円のご寄附をいただきました。保育園職員が学生時代の奨学金返済に長年苦労されていることから学生支援の必要性を感じ、これまでにも県内の高等教育機関へ継続したご支援をされています。



左)吉武 登氏、右)西田 睦学長

# Ⅲ 芳名簿 Ⅲ

#### 個人

有銘	工	木暮 一啓	高山 和則	新田 早苗	本村	真
石井	康雄	再田 優子	田里 友治	沼崎 聖司	與座	丈仁
井上	章二	下迫 俊司	田中 光	萩野 敦子	吉本	靖
大屋	祐輔	篠原 里美	土井 歩	比嘉 俊次	湧川	ひろみ
木村	匠	島村 賢正	東矢 光代	富加見 昌隆	和田	知久
桐島	孝	城間 弘充	長嶺 竜矢	平敷 昭人	和田	直樹
金城	福康	菅井 尚子	中村 真也	前島 修		
久高	友大	平良 美奈	中村 拓郎	前原 武子		
國吉	幸男	高井 宣明	楠城 治和	松倉 正治		
小池	真由美	高江洲 伊知子	西田 睦	宮尾 徹		

# 【 寄附方法 】

ご寄附の際には、基金の名称を寄附目的に沿ってお選びください。なお、本基金へのご寄附は、「寄附金控除」の対象となり、個人は「所得控除」、法人は「全額損金算入」が適用になれます。

オンラインによるご寄附



琉球大学基金Webサイトより、「寄附をする」をクリック。 http://www.kikin.jim.u-ryukyu.ac.jp/







「寄附情報入力画面」から、寄附先の基金をお選びいただき、 引き続き寄附情報をご入力のうえ、クレジットカードによる決済を ご利用ください。





※定期的(毎月、年2回、毎年)に定額をご支援いただける継続寄附も承っております。

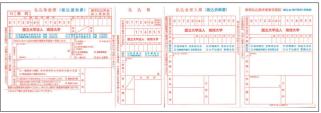
振込によるご寄附



琉球大学基金室へメール又は電話でお問い合わせください。右記の払込取扱票(振込用紙)を郵送いたします。



払込取扱票の通信欄に加え4票ともにお名前、入金額等の必要事項をご記入のうえ、ゆうちょ銀行・郵便局 又は指定振込先金融機関の本支店窓口にてご利用ください。



※所定の用紙以外からのお振込は、寄附先の確認等に支障をきたすため、上記の払込取扱票をご利用いただきますようお願い致します。





琉球大学基金室

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原1

**6**098-895-9013

⊠ kikin@acs.u-ryukyu.ac.jp







全保連は、琉球ゴールデンキングスを応援しています。



あなたに ホッ 全保連株式会社

家賃債務保証業者 登録番号 国土交通大臣(1)第16号



◀ 家賃債務保証の解説ページはこちら



『家賃債務保証』ってなんだろう?